

2022(令和4)年度

京都府NIE実践報告書



Newspaper in Education

(教育に新聞を)

京都府NIE推進協議会

目次

□ 発刊にあたって	京都府N I E推進協議会 会長 位藤紀美子	……1
1. 新聞を生かし、しなやかに学ぶ子の育成 ～新聞の内容を理解し、利用し、熟考する力を育む～	京都市立羽束師小学校 内野 英教	……2
2. 新聞を生かし、知識と可能性を進化させ、効果的に社会に参加し、自己の目標に近づく 子の育成。 ～新聞の内容を理解し、利用し、熟考する力を育む～	京都市立神川小学校 中川 和幸	……7
3. 新聞で広げ、つながる草内(くさじ)っ子	京田辺市立草内小学校 竹内 俊之	……11
4. 社会に対するアンテナを張る ～新聞記事から時事問題を学ぶ～	京都市立花山中学校 野中さやか	……17
5. 「授業で生徒が変わる」ではなく「生徒が授業を変える」ために	京都市立小栗栖中学校 今津 敏一	……21
6. 新聞から情報を取捨選択できる、多面的見方を養う実践	八幡市立男山東中学校 志村 五郎	……25
7. 新聞で培う「ことばの力」 ～豊かな表現力、読解力、対話力～	宮津市立栗田中学校 塩見 優真	……32
8. 「はぐくみたい3つの力(①基礎的な知識・技能 ②論理的に考え、伝える力 ③主体的 に学びに向かう姿勢)」の育成のために	京都府立丹後緑風高等学校久美浜学舎 山下 豊子	……37
9. 新聞記事から社会の課題を考え、問いを立てる	京都橘中学校・高等学校 小坂 至道	……42
□これまでの実践校、準実践校、奨励校、トライアル校		……48

※報告書の所属・肩書きは、2022年度在籍校のものです。

発刊にあたって

ご あ い さ つ

京都府N I E推進協議会
2022年度 会長 位藤 紀美子

2022年度の京都府におけるN I E実践報告書をお届けいたします。学校でのN I E活動に際しましては、実践指定校の先生がたを中心に、京都府・京都市の両教育委員会や学校、各新聞社、日本N I E学会等諸機関の多くのかたがたのご協力やご支援を賜ってきております。心より感謝を申し上げます。

このたびは、N I E指定校として9校（小学校3校、中学校4校、高等学校2校）より、それぞれ2年目または1年目の実践についてご報告いただいております。通常の教室での授業が継続しにくい状況で、新たな取組は、学習者の興味を惹くことはできても、年間カリキュラムに位置づけて、教科間や学年間の連携をはかりながら、一人ひとりの学習者の力を着実につけていくのは、容易なことではありません。小学校、中学校、高等学校、それぞれの学校段階で、新聞の閲覧や掲示のコーナー設置に始まり、校内の図書館担当者等との連携や、図書委員会や「朝の読書」の時間等も活用し、新聞に興味を持ち親しむ場を設けつつ、国語科や社会科、生活科、総合的な学習の時間などで、新聞やその記事を用いて、学習者に、情報収集→選択→活用→表現・発信等々について学ばせ、実践させています。児童・生徒にとって、新聞を直接手に取り、活用する体験を積み重ねていくことが大事だとよく分かります。実践に携わっている先生がたにお礼を申し上げます。

2023年度には、新型コロナは、第5類の感染症の扱いになりますが、まだ収まったわけではありませんので、それぞれが十分に注意をしなければならない状態です。このコロナ禍で、学校におけるI C T導入が急速に進んでいます。近年、日常的にスマートフォン等を使用する児童・生徒は少なくなく、加えて、家庭で授業を受けたり、授業中に関連項目について調べたりするために、個別にタブレットを活用することが増えているためです。

欧米では、「デジタル社会のよき担い手」を目指し、「デジタル・シティズンシップ教育」が進められており、日本でも、いくつかの学校で、実践が始まっていると伺っております。検定教科書のデジタル化も始まるなか、学校でのN I E活動もより重要になるのではと考えています。特に「紙面」を見ることの意味です。また、興味や疑問から始まる検索だけでなく、「読書と思索」の世界も大事です。一人ひとりの児童・生徒が「社会における自己」を認識し、新たな未来を拓く糧を得ることができるよう、願っております。

どうぞこれからもいっそうのご指導やご協力、ご支援を賜りますようお願い申し上げます。

小学校 国語科・社会科・生活科・総合的な学習の時間

新聞を生かし、しなやかに学ぶ子の育成

～新聞の内容を理解し、利用し、熟考する力を育む～

京都市立羽束師小学校 教頭 内野 英教

1. 実践の概要

本校は、令和3年度よりN I E実践校となり、本年度2年目の取組を終えた。学校目標「なりたい自分に向かって なかまと学び しなやかに のびる子の育成」を根底に置き、研究を進めてきた。年間計画の作成から始まり、校長室前の新聞コーナー・掲示板的活用、授業で取り組んだはがき新聞の学年フロアへの掲示、そして、帯時間（ステップタイム）に新聞を活用した授業を週に1回実施するなど、1年間を通して各自がアイデアを出し合いながら取組を進められた。

また、新聞を活用した授業の工夫について、校内研修や校外からの参加者を募った授業研究会を行い、全校・全市でN I Eの取組を進めていく足掛かりとした。また、低学年も楽しく新聞が活用できるよう、実践者の教職員中心に勉強会を実施した。

さらに、新聞記事に、より親しみがもてるよう、委員会活動にも新聞学習を取り入れ、みんなで選んだ新聞記事を放送部が週に1回紹介する機会も設けた。

次年度に向けて、各学年の年間計画も新たに作成した。各学年概ね1学期に1単元、年間で3単元、重点的に取り組む活動を設定した。朝の学習や帯時間を中心に、授業の中でも新聞を活用し、新聞に触れ合う時間を意図的に授業へ取り入れていきたい。今年度取り組んだ「新聞をスクラップしよう」「クラスの係からみんなへ 新聞で伝えよう」「校内放送での新聞記事紹介」「社会見学新聞」「歴史新聞」に加え、「SDGsを進めよう」「日本文化を発信しよう」など、学年にあった単元構成で実践を深めていきたい。

2. 新聞の置き場所と活用方法

子どもたちがいつでも閲覧し、手にとって読むことができる場所として、校長室前に新聞コーナーを設置している。さらに、新聞コーナーの横に掲示板を設置し、複数紙の新聞を読み比べたり、注目される記事を取り上げて掲示したりしている。立ち止まって新聞を読んだり教室に新聞を持ち帰って読んだりする子どもたちの姿が見られた。また、過去の新聞は、各クラスに随時配布し、教室での新聞学習に活用したり、子どもたちが興味をもった記事をいつでも読んだりすることができるようにした。



校長室前の新聞コーナー



令和4年度新設 テーマごと新聞記事ラミネートコーナー

3. 実践の内容

○低学年の取組

<主な取り組み>

廊下に小学生新聞の掲示



ホワイトボードに読む視点を書いて興味関心をもたせる。

だれもが興味をもてるようにたくさんの文字の中でここが面白そうという場所に矢印をつける。

帯時間(ステップタイム)に小学生新聞の記事の読み取りや見出しづくりをする。



はがき新聞づくり



<児童の変容>

二年生で新聞を扱うには、少しハードルが高いと感じていたが、親しみやすい記事や写真を紹介したり、小学生新聞を活用して掲示したりすることで、新聞に親しむ機会が自然と増えていったと感じる。また、『新聞を見る→新聞を読む→見出しを考える→新聞をつくる』という情報をインプットするところから日ごろの学習で得た知識や情報(生活科で調べてきた地域の情報)を発信するという一連の流れを低学年でも行えたことで、新聞を通してさらに子どもたちの活用力や表現力も高まった。

【ふりかえり ～成果○と課題△～】

- 記事の中からクイズのように問題を出すことで、楽しみながら新聞に触れ、読解力を付けることができた。
 - 各自が見出しを考え、紹介し合うことでどんな見出しが写真や記事に合うかその都度考えることができ、見出しを付ける感性が養われてきている。
 - はがき新聞づくりでは、いつもは読む新聞を発行する立場になることで、児童の意欲関心が非常に高まった。はがき新聞は文章量が少ないため気軽に取り組むことができた。少し大きめの原稿用紙（8mm）を用いることで二年生でも苦なく書くことができた。
 - ステップタイムで見出しを考えることを続けてきたため、はがき新聞の見出しをセンスよくすぐにつけることができた。
 - 新聞を掲示することで、活字に興味をもつようになった。いろいろな情報を得ることができ、子ども同士で新聞を前におしゃべりする場面が見られ話題が広がった。
- △読む児童が限られているところもあるので、掲示とともに記事の紹介も並行して行う必要がある。

○中学年の取組

<主な取り組み>

- ・国語科「新聞を作ろう」の学習で新聞の書き方について学んだ。その後、社会科の「用水のけんせつ～琵琶湖疏水～」の学習のまとめで新聞を作成した。
- ・京都新聞ジュニアタイムズの編集長をゲストティーチャーに招き、新聞の見出しの作り方や取材の仕方について学んだ。学んだことをもとに、琵琶湖疏水の社会科見学に行き、見てきたことや学んだことを新聞にまとめた。
- ・教室の本棚に新聞を置き、定期的に担任が新聞記事の読み聞かせを行った。
- ・夏休み明け、夏休みの思い出をはがき新聞にまとめた。
- ・2学期中頃より、朝の会で定期的に自分の興味のある記事を紹介する時間を設けた。
- ・総合的な学習の時間に「環境やさしさ大作戦」をし、低学年に地球環境について伝えるために、新聞記事を使ってどんなことを紹介するかを考える授業を行った。



<児童の変容>

【成果】

4月当初より、子ども達がすぐ手に取れる場所に新聞を置いておくことで、時間のある時に新聞を読んでみようと思う児童が増えた。また、一人が興味のある記事を見ていると、みんなが自然と集まって話をしたり、一緒に記事を見たりすることで対話が生まれていた。新聞にまとめることを社会科で何度か行うことで、新聞にまとめる力が少しずつついてきた。限られたスペースに自



分の思いを載せるためには、何を書けばよいか、自分の書きたいことを精選したり、要約したりできるようになってきた。見出しの大切さを教えていただいたことで、見出しを何にするかをしっかりと考え、新聞を書こうとする児童が増えた。



また、はがき新聞はよりスペースが少ないので、難しいかと考えていたが、子ども達は自分の夏休みの思い出という書きたい目的があったので、その中にコンパクトにまとめ、楽しんで活動することができていた。何かまとめてみんなに発信しようとしたときに、新聞にまとめればよいという意見がすぐに出てきて、自分の発信方法の一つとして新聞を使っていきたいと思える児童が多くなった。

ゲストティーチャーとして京都新聞社の方に来ていただくことで、子ども達はとても意欲的に新聞について学ぶことができた。新聞記事をPDFにして一つずつの短い記事にすることで、子ども達は記事を読みやすいようで、集中して読み、自分が必要な情報を集めることができ、とても効果的だった。



【課題】

昨年度より新聞を読もうとする児童は増えた。しかし、子ども用の新聞は読めるが、一般紙は見るだけで読めない漢字も多いので、まだまだ内容をたくさん読める児童は少ない。見出しの大切さには気付いているが、語彙が少なく、目を引く見出しを作ることができる児童を増やしていきたい。

○高学年の取組

<主な取り組み>

「NIEのまど」と題して自分の興味をもった記事を共有できるようにした。

まず、新聞記事の中から、自分が気になった部分に線を引いたり、囲ったりして記事をいくつか見つける。次に、いくつか囲んだ記事をもう一度読み返し、自分の意見や疑問に思ったことや友だちに伝えたいものを1つ選び、切り取る。最後に、画用紙に記事を貼り、自分の意見や疑問に思ったことを文章にして書く。長くなりすぎないように5W1Hを使って短い文の中で考えを表現することに気を付けた。

社会科(歴史分野)各単元のまとめの学習でロイロノートにて新聞づくりをした。新聞づくりをすることで、単元の学習を振り返りながらテストに向けて自分が大切だと思う部分や疑問に思った部分などをまとめることができた。



素敵歴史新聞



考察

一風と泰公の動きは良かったけど、幕府は元と戦った武士に新しい領地をあげられなかったことに思っているのか知りたいです。鎌倉時代に関わっている人たちが色々なことに関わって、どのように関わっていたのかも知っています。鎌倉時代は本当に強くて、凄いなと思いました。

<児童の変容>

昨年度は、ワークシートを使用し選ばれた新聞記事を読み、記事の内容を問う方法で進めていた。今年度は、自ら記事を選び選んだ記事から自分の考えや疑問を文章で表現できるように取り組んだ。自分や友だちが疑問に思ったことを宿題の自主勉強へ派生し、調べる児童もでてきた。

新聞づくりでは、GIGA 端末のロイロノート内の資料箱に教科書に載っている資料を保存しておくことで、自分の書きたい記事の資料を自ら決定し記事にすることができるため悩む時間が少なく取り組むことができた。

【ふりかえり】

「NIE のまど」を回覧し、成果物を共有することで同じ記事でも友達との感じ方や意見の違いがあることに気づくことができた。

素敵歴史新聞では、なかなか授業時間に完成させられなかった児童も、GIGA 端末（ICT 機器）を駆使することで時間内に提出できる機会が増えた。

記事の意味を理解しながら読むことに時間を有する部分や自分の思いを文で書く際、話し言葉と書き言葉が交ざってしまう部分があることが課題と言える。

4. 成果と課題

【成果】

- ・すすんで新聞を手取る児童が増えた。
- ・身近な社会や世の中の出来事に関心をもつようになってきた。
- ・毎週の学習を通して、新聞を読むことが楽しいと思うようになった。
- ・読解力やコミュニケーション力を高めることができた。
- ・授業者が資料としての新聞活用を意識できるようになった。

【課題】

- ・資料が多岐に渡り、記事の選択に迷う児童がいた。
- ・低学年では、フリガナをつけても新聞の内容を理解することが難しい子もいる。
- ・活動内容によっては、意欲を高められないものもあった。資料教材等の選定が大事である。

ICT 機器の普及に伴い、知りたいことの多くが簡単に調べられる時代になってきた。そのため、子ども達のなかで活字離れがおきてきているという印象がある。新聞を読んだり読書をしたりすることは、想像力を膨らませ、語彙力を高め、様々な情報を活用しながら未来を切り拓く、「しなやかな生き方」につながっていくと考える。この研究を通して培った成果と課題を生かしながら、次年度も、子どもたちが新聞の内容を理解し、利用し、熟考する力を育めるような実践に取り組んでいきたい。

小学校 国語科・社会科・総合的な学習の時間・特別活動等

新聞を生かし、知識と可能性を進化させ、効果的に社会に参加し、 自己の目標に近づく子の育成

～新聞の内容を理解し、利用し、熟考する力を育む～

京都市立神川小学校 教諭 中川 和幸

1. 実践の概要

本校は、「自ら学び 共に高め合い 自分の将来を切り開く子の育成」という学校目標を掲げ、研究に関わる取組を進めてきた。N I E実践指定校初年度の令和4年度は、国語科、社会科、総合的な学習の時間、特別活動等を中心に壁新聞作りや、新聞を読んで考えたことをまとめたり、相手に伝えたりする活動に取り組んだ。

1学期には、職員室前の棚に『新聞コーナー』を設置し、児童に新聞に触れることができるように環境整備を行った。それと同時に、N I Eの取組についての今後の計画と学年ごとに実践できる内容について実践代表者から校内研修を行った。

2学期には、教科学習の中に新聞を多くの学年で取り入れることができた。4年生の国語科「新聞を作ろう」、3年生の社会科「商店のはたらき」5年生国語科「新聞を読もう」などの単元で、新聞機能学習ということで、実際の新聞を児童一人一人が手に取りながら、新聞の特徴を確かめ、オリジナルの新聞作りの意欲を高めることができた。

3学期には、各担任が新聞記事で気になった記事を見つけて授業の導入場面で紹介をしたり、朝の会のグループトークの時間に新聞記事の話題をテーマにしたりするなど新聞を積極的に活用しようと取組み、各学年で新聞に親しみ、触れる機会を増やすことができた。

2. 新聞の置き場所と活用方法

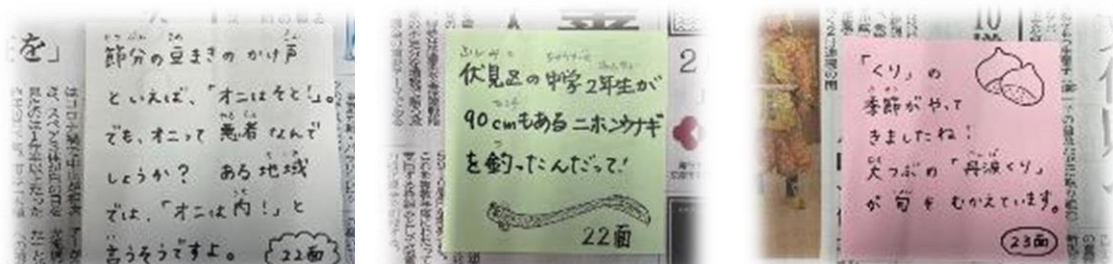
児童がいつでも新聞を手にすることができるように職員室前の棚を『新聞コーナー』とした。児童用の机と椅子を置いて休み時間等に児童が新聞に触れることができるように環境整備を行った。

新聞の1面に児童の目に付きやすいように大きめの付箋を貼って、その日の注目の記事が何面にあり、どういった記事なのかを知らせるようにした。地元京都の記事や時事ネタ等をピックアップし、児童に紹介するようにした。また、過去の新聞をまとめて棚の下に貯めていくようにすることで、授業で活用する際に児童数分の新聞をまとめて利用することができた。

そうした取組を進めることで、徐々に休み時間等に新聞を手にとる児童が見られるようになった。



【注目の記事を紹介した付箋の例】



3. 実践の内容

○2年生の取組

・図画工作科「しんぶんとなかよし」では、家から持ち寄った新聞紙をクシャクシャにしたり、ビリッと破いたり、ピンと伸ばしたりしていろんな形に変身させた。形や色などを基に、自分のイメージをもちながら、新聞紙やつくったものの造形的面白さや楽しさ、造形的な活動、作り方などについて、感じ取ったり考えたりし、自分の見方や感じ方を広げることができた。



・新聞クイズ

職員室前に置いてある新聞紙を一人一人に渡し、写真や絵・広告などに注目し、担任がそれに関するクイズを出題した。まずは、新聞という媒体に慣れるというねらいをもって行った。また、2年生までに習った漢字を記事の中から見つける活動をするので、新聞に慣れ親しむことができた。



○3年生の取組

・社会科「京都市の様子」の単元で、自分たちが選ぶ京都市のすてきな場所の紹介を新聞の形式にして書く取り組みを行った。どの文章をどこに書くのか、見出しはどのようにするのかなどを考えながら新聞を作成した。

・社会科「商店のはたらき」の単元では、スーパーマーケットの工夫についてまとめる際に、前回の京都市の様子で作成した新聞の経験を生かし、見出しに書く文の中身や大きさにも着目し、人目に付きやすいような工夫をすることを意識して取り組むことができた。



○4年生の取組

・国語科「アップとルーズで伝える」の学習では、まずは、教科書の内容からアップとルーズの写真の特徴を捉えることを念頭に置いた。特徴を理解した後に、実際の新聞を手にし、自分が興味をもった写真がアップで撮られた写真なのか、ルーズで撮られた写真なのかを考え、友だち同士で伝え合う取り組みを行った。「この写真はアップで撮れているにちがいない。」「これはどっちな正直わからんなあ。」といったやり取りが聞かれた。また、アップとして紹介した写真でも、他の友だちはルーズではないかと意見が分かれることが多々あった。そうしたやりとりから、写真だけでなく記事の見出しや内容を読み直したりする様子が見られた。この記事を書いた人が一番伝えたいことは何か、というところまで考えることができている児童も見られ、今後の新聞学習に繋がる学習となった。



・新聞記事の中から自分が興味をもった記事の一つを選び、学級のみんなの紹介する取り組みを行った。日付の異なる様々な新聞をランダムに手渡し、その中から記事を選んでいった。取り組んだ時期が丁度サッカーワールドカップが行われた時でもあり、スポーツに関する記事に注目する児童が多かったが、国語科「アップとルーズで伝える」「新聞を作ろう」での学習を生かして写真に注目したり、見出しや小見出しの言葉から興味をもった記事を読み進めたりすることができていた。選んだ後には、その記事を切り取り、ワークシートに貼付けた。そして、なぜその記事を選んだのかを紹介する文章を書き、学級の中で交流することができた。同じサッカーの記事を選んでいる児童の中でも、選手の目線に注目した記事、勝敗に一喜一憂する国民の様子を伝える記事など様々であり、児童によって着目する視点が異なるということがよく分かる取組となった。

【新聞記事の紹介の取組例】



「チョコの原料 カカオ畑で働く子の問題を知って」という見出しの『子』という文字に注目し、この記事を選んだという理由が書かれていた。

※朝日小学生新聞 2022年2月12日

○5年生の取組

・国語科「新聞を読もう」の学習では、新聞の作り方や工夫を知ること、読み方を身につけて、生活や学習の中に生かしていくこと、二つの記事を比べて読み、どんなちがいがあ
るのか、どうしてちがうのかを考えることをねらいとして行った。複数の新聞の1面を見
比べて、気づいたこと疑問に思ったことを出し合った。京都新聞・毎日新聞・日本経済新
聞の三紙の1面を比べ、同じ日なのに取り上げている記事も違うことや見出しのちがいに
ついて学ぶことができた。

・読売新聞の教育ネットワーク「ワークシート」を使い、新聞の文章からキーワードとな
る言葉や自分の感想を持つこと繰り返し練習した。また、取り上げた記事の内容と関連す
る事柄について、より深く知りたい、考えたいことについて自ら調べる活動を行った。

4. 成果と課題

【成果】

- ・これから新聞を読んでいこうと意欲を高めた児童が見られた。
- ・新聞には様々な情報が詰まっており、情報を得る手段として有効だと考える児童が増
えた。
- ・新聞を読む際に注目する点（見出しや写真など）を理解できた児童が増えた。
- ・興味を持った記事を友だちに紹介することで、読解力やコミュニケーション力を高
めることができた。

【課題】

- ・新聞の内容を理解することが難しい児童が少なからずいる。
(ふりがなを付けたり、解説をしないと理解が難しい)
- ・情報を集めるには、ネットでの検索が一番と考える児童も多く、新聞の有効性・有
用性について捉えきることが難しい。
- ・新聞コーナーを設置し、新聞を手にする児童が増えたのは確かだが、決まった児童が
多く、学年全体・学校全体としてまだまだ拡がりを見せていない。

【実践者の感想】

今回のNIEの取組では、GIGA 端末を活用し、朝日小学生新聞のデジタル新聞を申し込
んだ。児童が休み時間など、好きな時間に見ることができるような取組も行った。記事の
内容を交流することで、新聞記事の内容に興味関心を持つこと、コミュニケーション力を
高めるのに有効な手段ではあった。今後、デジタル新聞の活用をさらに進めていきたい
という思いがある一方で、新聞機能を学習したり、新聞製作の際の割付け方などを学んだ
りするためには、やはり従来の新聞が学習しやすいという印象をもった。従来の新聞とデ
ジタル新聞を場面によって使い分けていくことが今後重要になってくると感じた。

小学校 全学年 国語・総合的な学習の時間

新聞で広げ、つながる草内（くさじ）っ子

京田辺市立草内小学校 教諭 竹内 俊之

1. 実践の概要

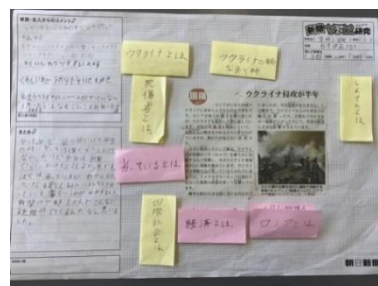
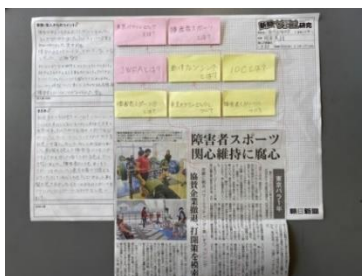
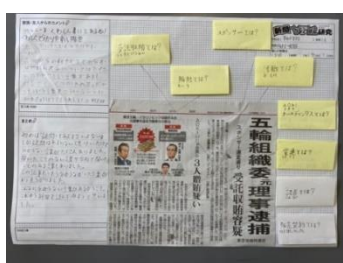
本校は「互いに学び合い、高め合う草内っ子の育成」を学校目標に掲げ、研究主題を「新聞で広げ、つながる草内（くさじ）っ子」と設定し、NIE実践校としての2年目も全学年で様々な取組を行った。1年目同様、新聞のよさやおもしろさに触れ、社会のことを知るきっかけ、社会とつながってほしいと考えた。

2. 実践の内容

（6年生）

① 【総合的な学習の時間「なぞ解き研究」】

今回は、朝日新聞主催の「謎解き研究コンクール」に全員応募した。子どもたちの意欲は非常に高く、自分の気になる記事の分からない言葉について意欲的に調べることができていた。最初は、子どもたちが取り組みやすいよう教師が選んだ記事について実践を行った。現在の情勢を鑑み、ウクライナとロシアとの戦争などを子ども新聞から切り取り、やり方等を確認してから、取り組んだ。また、国語辞典等の使用のみならず、それに関わる記事等をタブレット端末で検索を行い、さらに学習を深めることができた。そして、自分自身で記事を選び、文章を読み、気になる言葉を調べ、さらにそれに関わる記事を探し、検索を行い、理解を深めていった。最終的に、今年度は51名応募し、1点が優秀賞に選出された。



② 【学年掲示板、NIE コーナーの活用】

学年掲示板に教師が気になる記事を選び、それに一言感想を添え、子どもたちの興味感心を引き上げた。どの児童も読みやすいように、できるだけルビがふってある子ども新聞を選び、掲示を行った。

また、読売新聞、朝日新聞、日経新聞、京都新聞などの新聞を学年の NIE コーナーに置き、子どもたちが気になった記事を自分で見つけ、読みやすい環境づくりを行った。

(5年生)

① 【総合的な学習の時間「なぞ解き研究」】

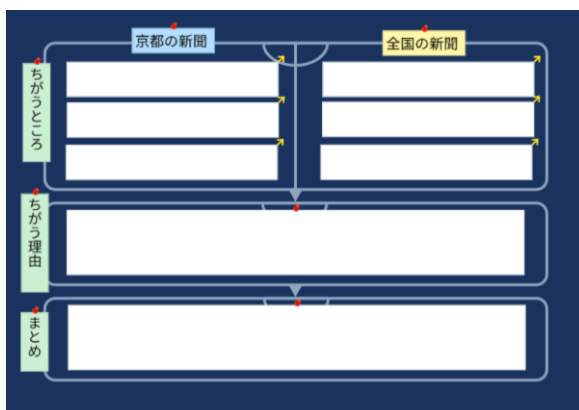
朝日新聞主催の「謎解き研究コンクール」に取り組んだ。国語辞典やタブレットを活用し、言葉の意味を調べながら記事を読むことで、より記事の内容が伝わり、深く新聞を読むことに繋がっていた。また、読んだ後にまとめを書くことを通して、記事に対する自分の考えをもつこともできていた。

② 【社会科の学習「新聞ができるまで」】

グループごとに新聞にはどのような種類の記事があるのかを探す活動を行った。政治、スポーツ、経済、暮らし、事件や事故などの他にも、広告やテレビ欄、最近では二次元コードも記載されているなどいろいろな気づきがあった。その後、それぞれの記事を書くのが取材記者で、その記事をチェックするデスクの役割や、出来上がった記事を編集する編集記者がいることなど、たくさんの方が関わって新聞が制作されていることを学習した。

③ 【国語の学習「地方紙と全国紙の違いについて」】

同じ内容の記事を扱った地方紙と全国紙の2つを見比べる活動を行った。どういう点が違うのかを挙げた後、どうしてそのような違いがあるのかを考え、交流した。新聞には、読み手(読者)を意識した様々な工夫がされていることを知ることができた。



④ 【NIE コーナー「気になる記事の掲示」】

学年掲示板に教師が気になる記事を選び、記事に関する教師の思いや考えを添え、子どもたちの興味感心を引き上げた。立ち止まり、読んでいる児童も多かった。

⑤ 【新聞コーナーの設置】

読売新聞、朝日新聞、日経新聞、京都新聞などの新聞を学年の新聞コーナーに置き、子どもたちが気になった記事を自分で見つけ、読みやすい環境づくりを行った。

(4年生)

① 【総合的な学習の時間「目指せ県境博士」】

1学期は総合で、環境について学んだが、その1つに学んだことをいくつか選んで、タブレットで新聞にまとめた。新聞の一面のレイアウトの意味には、大見出し、小見出し、写真やデータをつけたりしてまとめていく形があったり、意味があることを知ってから、環境新聞としてまとめた。

② 【学年掲示板とNIEコーナー】

ルビがふってあって読みやすいので、京都新聞ジュニアタイムズを読める場所を設置した。子供たちが読んでいる場面を多く見受けられた。

また2学期に1度だけ(3時間扱い)、「謎解き研究」として気になる記事を深読みした。班で読み合ったり、その用紙を廊下掲示することで、学年全体で互いの記事や感想を読み合ったりすることもできた。新聞に興味を持ったようだった。

さらに、学年掲示板にワールドカップでの日本代表の試合の新聞記事を掲示したときは、子供たちは食い入るように読んでいた。新聞の迫力ある写真や記事を興味深く読んでいた。



(3年生)

① 【国語「新聞を開いてみよう」】

3学期には、新聞の中から写真を選び、吹き出しをつけ、台詞を考える活動をした。野球やサッカーなど、スポーツの写真に興味をもつ児童が多く、記事を読んでいる場面も見られた。



② 【NIE コーナー】

教室前廊下に、京都新聞ジュニアタイムズを設置した。3年生にとっては、まだ読めない漢字が多いため、熟読する様子は見られないが、ペラペラめくって写真や見出しを見ている場面を多く見受けられた。新聞に興味を持ったようだった。

(2年生)

① 【生活科「とび出せ！まちのたんけんたい！」】

個人が調べた内容をまとめたものを集め、班ごとに新聞形式にて模造紙1枚の掲示物を作成した。タイトルを考えたり、イラストを足したりしながら、見ている人に興味を持ってもらう工夫を考えながら作成することができた。



② 【NIE コーナー】

京都新聞ジュニアタイムズを置いて、だれでも見られるようにした。子どもたちは週ごとに新聞が新しくなることを楽しみにしている様子で、新聞に興味を持っていた。また、ジュニアタイムズはふりがながふつてあるので読みやすく、読んだ内容を話題にしている児童もいた。



(1年生)

① 【国語「ひらがな学習」】

京都新聞ジュニアタイムズで、新聞を読ませて、ひらがなを見つけたりした。最初はタブレットで撮影した画像を送信していたが、児童たちの「もっと読みたい」という声に応え、一人一人に新聞を配付した。児童たちは自分たちの読める部分を喜んで読んでいた。



(特別支援学級)

・学年や学習内容、興味も違うクラスなので、内容を個別に変えて、新聞を活用した。クイズが好きな子、怖い話が好きな子、マンガが好きな子。始めは、新聞を見てくれるか心配だったが、興味のある内容には、関心を示すことができた。

(図書室)

・1年目同様、図書室にも新聞を読めるコーナーを作り、一面の紙面の意味を解説したものを貼っておいた。また、古い新聞も保管し、いろいろな学年が使えるようにした。

3. 成果

(子供の変容)

・子供たちはテレビやインターネットで出来事をなんとなく知っているが、詳しくは知らないので、新聞を読むことや語句の意味を調べることで、これまでの知識がつながり、社会で起きている出来事への関心やもっと調べてみたいという思いが高まっていた。

・新聞の形で学習してきたことをまとめるのは、情報処理能力を高めるにはとても効果的であった。情報の取捨選択力、まとめる力、それを発表する力など、今後も国語や社会、総合などで取り組んでいきたい。

・2～6年生が新聞閲覧コーナーを作ったので、児童たちの目に触れる機会が増えた。

(実践者の感想)

・1年目に高学年で行った「謎解き研究」がとても有意義だったので、勧めたところ、いろいろな学年が取り組んだ。そのやり方をしっかりと継承できた。NIE実践校でなくても、続けたいという教師の声が多くあった。

・各学年の掲示板上に1～2週間ごとに、「NIEこんな記事が気になりました」のコーナーを作り、(担任外や事務職員も含めて、新聞記事と全職員の感想や意見を書いたものを掲示した。特に校長先生は、いろいろな新聞記事を取り上げてくれて、全校朝礼でも紹介してくれた。

4. 課題

・カリキュラムとして新聞の学習をどのように行い、何を学ばせるのか、何時間するのかなどをきちんと決めないとなかなか取り組めない。

・実践指定校ではなくなる中で、新聞をたくさん購入できなかったり、NIE会議がなくなったり、学校としてどう取り組んでいくのかを検討していく必要がある。そのために、我々教職員が日頃から新聞を読み、気になった情報については、すすんで子供たちに語るなど発達段階に応じて取り組みを継続していく必要がある。

中学校 国語科 1年

社会に対するアンテナを張る

～新聞記事から時事問題を学ぶ～

京都市立花山中学校 教諭 野中 さやか

1. 実践の概要

本校は、「志を高く、多様な学びを通して、持続可能な社会の担い手を育成する」ことを学校教育目標として掲げている。「多様な学び」という観点から、学び方の1つの手段として、「新聞」というメディアを活用した取組を設定した。

現在、生徒を取り巻く学習環境は大きく変化しており、その1つが、GIGAスクール構想のもとで進められているICTを活用した学びの構築である。生徒には1人1台タブレットが支給されており、必要があれば授業中でもインターネットを通じて情報を収集することが可能となっている。また、本校の1年生は約9割の生徒がスマートフォンを所持しており、家庭でも必要な時に必要な情報を瞬時に手にできる状況にある。内閣府が調査した「青少年のインターネット利用環境実態調査」においても、スマートフォンの主な利用内容として、動画視聴やSNSの利用などに次いで、情報検索が挙げられており、現代を生きる中学生にとって、インターネットは情報を収集するうえで欠かせないメディアであることが分かる。

このように、学校ではタブレット、家庭ではスマートフォンを用いて、まさに“今”世界で起こっていることを“今”知ることができる環境下にある生徒にとって情報の収集源はインターネット一択と言っても過言ではなく、新聞離れは急速に進んでいるのである。現に、昨年度、本校で実施した「家庭における新聞購読数」のアンケート結果においても、購読していると答えた家庭の割合はおよそ3割だったことから、今年度においても購読数はなだらかに減少傾向にあることが推測できる。

では、なぜ今「新聞」なのか。

確かに、インターネットには世界中の情報を瞬時に取得できるというメリットがあるが、中には虚偽の情報も含まれている場合がある。画面上でスクロールしながら得た情報は、多くの量を一度に取得できても、記憶には残りにくいというデメリットもある。一方で、新聞は紙面を通して様々な情報を一覧で見ることができるうえ、同じ情報でも他社の紙面と並べて比較しながら読むこともできる。瞬時性ではインターネットに劣るものの、編集という作業が含まれている分、情報の正確性は高い。また、活字を通して身につく言語能力や、課題解決能力、コミュニケーション能力を高める効果も期待できることから「新聞」というメディアを通じた実践を行うこととした。

2. 実践の内容

(1) 学年の取組

毎国語の授業において、初めの5分間を帯学習の時間に設定し、その時間にあらかじめ教員が選んだ記事をワークシート形式にしたものを配布。内容については、①生徒が関心をもって読めるもの ②生徒が自分事として捉えられるものを中心に選び、ワークシートを作成した。ワークシートには、記事を読んだ感想を書くものだけではなく、記事の内容についての自身の考えを問うものなど、その時々で発問を変え、多様な視点で読む力を高めることもねらいの1つとした。

取組を続ける中で、今日は何の記事だろうと楽しみにする生徒の様子や、テレビやインターネット等、別のメディアで得た情報をもとに、今日の記事の内容を予測する姿も見られ、時事問題に関する意識の高まりが少しではあるが感じられた。



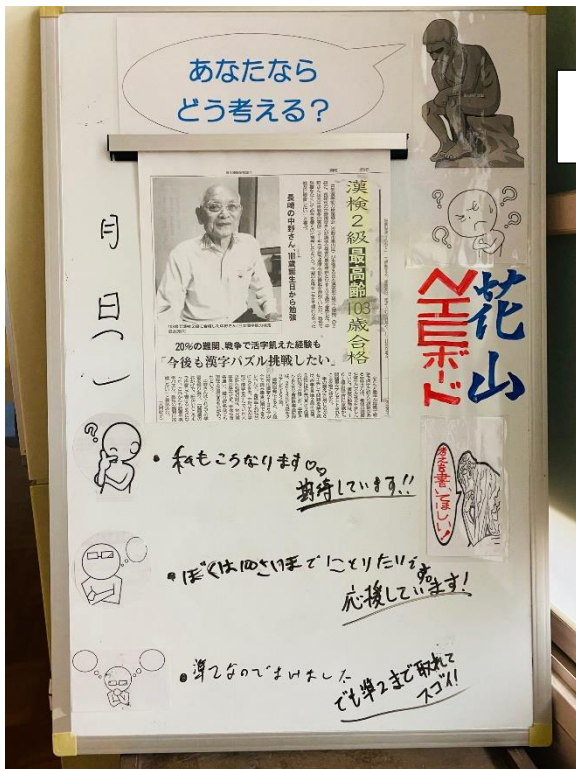
帯学習に取り組んでいる様子



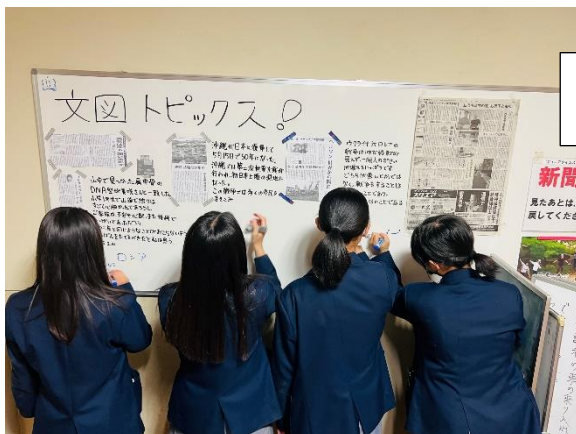
(2) 学校全体の取組

学校全体の取組としては、昨年度から引き続き、N I Eコーナーとして職員室横と図書室に新聞を常置し、いつでも新聞を手にとれる環境を整備している。それぞれの場所において、休み時間や放課後などに新聞を手に取り、読んでいる生徒の姿が見られるようになってきた。

また、今年度は、文化図書委員会とも連携を図り、職員室横のN I Eコーナーに、委員会生徒が選んだ記事と、その記事に関するコメントを掲示し、新聞への興味や親しみがわく仕掛けを施した。



職員室横のN I Eコーナー



文化図書委員会の様子

3. 成果と課題

帯学習の取組においては、今起こっている事象を中心に記事を選んでいたため、生徒も関心をもって読むことができていた。また、それぞれの事象について、自分自身はどう考えるか、自分自身が当事者だとしたらこの問題とどのように向き合うか、といった問いを投げかけることで、記事に書かれている事象を自分事として捉えて読んだ跡がワークシートに記されていた。

生徒自身が記事の内容を予測するために、自主的に他のメディアから情報を収集している様子も見られ、この取組が社会に関心をもつ1つのきっかけとなっていたように感じる。新聞を身近なものに感じ、自分自身の興味関心の幅が広がったこと、今までは知り得もしなかった社会の状況、情勢について知る機会が生まれたことが今年度の成果であり、今後は、自身が感じたこと、考えたことを他者と共有し、意見交流を図る場面を授業の中でも適宜設けていきたい。

また、取組を進める中で、小学校の時にも新聞を活用した授業を受けていたことも判明し、こういった部分でも小中連携を図ることができるのだという発見もあった。

インターネット優位な社会ではあるが、その中で今もなお廃れずに生き続けている新聞というメディア。そこには必ず存在価値があるのだと考える。紙面にこめられた記者の思いに触れ、温度感のある情報を手にすること。それは画面上では感じ取れない、新聞ならではのものだと思う。そういった部分も生徒には伝えながら、次年度以降も引き続き、可能な限りN I Eの取組を進めていきたい。

中学校 国語科・総合的な学習の時間

「授業で生徒が変わる」ではなく「生徒が授業を変える」ために

京都市立小栗栖中学校 校長 今津 敏一

1. 本校の概要

本校は令和7年4月に、小栗栖中学校・小栗栖小学校・小栗栖宮山小学校・石田小学校の4校が統合して、新たに京都市立栄桜（えいおう）小中学校として義務教育学校となる学校である。（小栗栖小学校と石田小学校は令和4年度に一次統合済み）

醍醐地域初の義務教育学校の設立に向けて、新たな取組を行っているが、小栗栖中学校は昭和51年4月に醍醐中学校の分校として開校し、当初は生徒数310名の中学校であったが、団地の建設に伴い人口が増え、最大1000名を超える大規模校へと発展していった。しかし、時代と共に高齢も進み、現在は生徒数223名となり、令和7年度義務教育学校になって1年生から9年生までの総数で600名前後の児童生徒数で開校する予定である。

2. 実践の概要

校長として赴任した2年目（令和3年度）に、3年生が修学旅行に向けた取組の中でSDGs（Sustainable Development Goals：持続可能な開発目標）について学習した際に、京都文教大学こども教育学部の橋本祥夫教授にご助言をいただき、自分たちで新聞を作成する取組を行った。



まず、新聞を読むことから始め、記事の内容を分類していき、記事をまとめるという取組の中で、想定以上に熱心に取り組むことができ、修学旅行での富士山に関する学習に大いに参考となった。修学旅行後もSDGsについて学習し、最終的に京都にどのように還元できるかなどを発信した報告会では、校下の小学6年生に向けてSDGsに関する自分の考えを発表することができた。さらに、最終的には自分たちの記事がまとめられた新聞も完成すること



ができ、大きな自信となった。その後も学年の廊下に新聞を置いてみたところ、自分から手に取って読む姿が見受けられるようになってきた。



そこで、新聞に関する調査を行ってみたところ、想定外の数字に驚かされた。全学年の生徒に新聞を定期購読している家庭を調査すると、2022年度の調査によると全国平均の購読者が61.3%であり、そのうち30歳代が30%に対し、60歳以上が80%であった。しかし、小栗栖中学校では1年生が16%、2年生が17%であり、3年生にいたっては7%にとどまる数字であり、学校としては13%に過ぎないことが分かった。別の質問で、祖父母と同居しているという家庭は8%だったことも要因に挙げられるかもしれない。

1. 実践の内容

(1) 新聞に親しむ

生徒が、思ったより新聞に興味を持ったのは、読み慣れているからではなく、これまでほとんど触れてこなかったということが大きな要因であることから、まず身近に新聞が読める環境を作りたかったことからNIEの実践に参加させていただいた。

それまで、廊下のスペースに京都府の高等学校のポスターを貼りだし、進路について考えたり、自主的に学習したり、教員と談笑することができるスペースに、配達された新聞を常置することとし、いつでも生徒が手に取って読める環境を作り、学校だよりやホームページでも紹介することで、生徒や保護者にも浸透するようにしてみた。



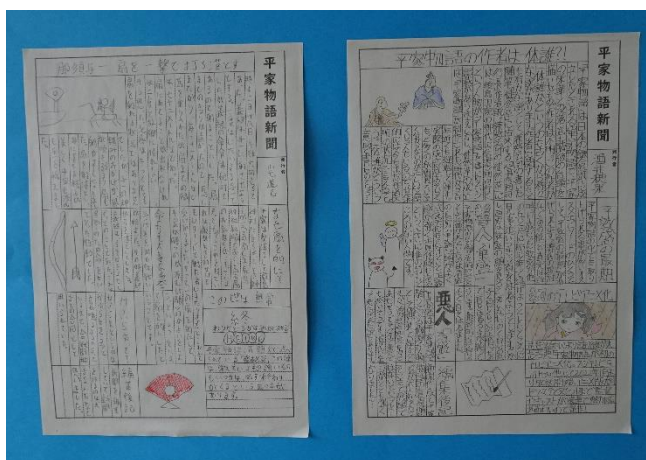
すると、登校時や下校時に、そして放課後にもこのスペースに集まる生徒が増えてきて、新聞を読んだり、みんなで学習したりすることが、ごく自然な環境となり、効果があった。



(2) 国語科での取組 (2年)

2年生の国語の授業で

「扇の的、義経の弓流れ」を読み、新聞にまとめることを課題とした。そのために、的を射る人物の心情やその時の状況、見送る武士の心情を考えること。扇の的を射落とした状況描写を読み取ること、舞を舞う男や弓を拾い上げた義経の姿から人物像を読み取ること、歴史的背景や自分が気になった部分について調べまとめることとした。初めての経験ということもあり、実際に新聞を見てレイアウトを研究するとともに、いくつかの例をサンプルとして提示することで取り組んだ。A4サイズの完成作品を数点廊下に掲示し、2年生だけではなく、1年生も廊下を移動する際に目につく場所に展示し、閲覧できるようにした。



(3) 総合的な学習の時間での取組 (2年)

本校では、総合的な学習の時間を「共創(きょうそう)」の時間とし、多くの人と協働し、新たな自分を創造することを目的としている。2年生は来年度実施する修学旅行に向けた取組を始めている。

2年生では国語の時間に新聞を作成したことを経験に、今回は模造紙に新聞作成に取り組ませた。各班でテーマを設定し、自分たちが訪れる「壱岐」の地域について「読んだ人が行きたくなる」工夫を加えながら記事集めを行い完成させた。

1年生に聞かせる形でポスターセッションとして発表した。本校の重点目標の中に「アウトプット」の重要性を上げており、自分が分かって終わるのではなく、相手にどのようにわかりやすく伝えるかという点では、まだまだ経験は不足しているものの、第一歩としては貴重な経験となった。

模造紙の新聞は、しばらく展示しており、自分が聞いた以外の新聞の内容を興味深く読んでいる生徒の姿があった。

こういった積み上げた経験をもとに、来年度の修学旅行についてはその成果を改めてまとめる機会を設けたいと考えている。



3. 成果と課題

今後、家庭での新聞購読の割合が増えることはなかなか望めないが、学校で新聞に触れることができる、ゆっくり読むことができる環境を保障していくことで、これが日常になっていくことが望まれる。そのために、来年度も生徒が自由に閲覧できるスペースと、配送いただける新聞を読みやすい状態で提示するとともに、1つの案として、ニューヨークタイムズのような英字新聞や中学生新聞のようなものも合わせて閲覧できるようにすることで、生徒の興味関心を広げていき、常に新聞を意識したり、ちょっとした時間でも読もうとしたりする習慣を身につけさせようと思っている。

その結果として、総合的な学習の時間では、生徒が“インプット”から“アウトプット”へ、すなわち“覚える”

から“使える”への変革を成すことで、最終目標としてきた「授業で生徒を変える」から「授業で生徒が変わる」への転換期を経て、来年度は「生徒が授業を変える」への転換を進めていきたい。そのために学校生活のあらゆる場面で新聞の存在を意識させていきたいと考えている。



新聞から情報を取捨選択できる、多面的見方を養う実践

八幡市立男山東中学校 教諭 志村 五郎

1. 実践の概要

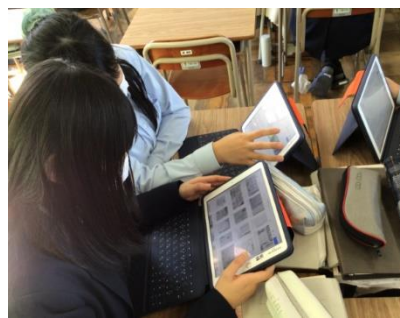
本校は、「自ら学び、心豊かで逞しく生きる生徒の育成」という学校教育目標のもと、目指す生徒像の「主体的に学び考え、生涯にわたって学ぶ意欲を持ち続ける生徒の育成」を図るため、N I E教育を活用した。そのN I Eの実践指定校として2年目であった今年度は、「主体的に学び考える」ために、国語科・社会科で新聞を活用することで、主体的・対話的で深い学びの実現を目指した。

前年度は、新聞を家庭で定期購読していない家庭が多い状態があった。そこで新聞というメディア媒体にいかに関われるかというところから始まった。今年度は、その新聞を「読み込んでいく」ことにした。まずは新聞を読むことを社会科として実施し、国語科では新聞の読み比べに取り組んだ。

また、まだまだコロナ禍の影響が大きく、新聞を誰もが触ることができる状況に不安を感じている印象があったが、誰の目にも触れやすい・手に取りやすい環境整備を行い、実践を続けた。本校は朝のHR前の10分間を朝読書の時間としているため、その時間に新聞を読む生徒も前年度同様おり、少しは身近な読み物として認識されていた。

2. 実践の内容

(1) 国語科の実践



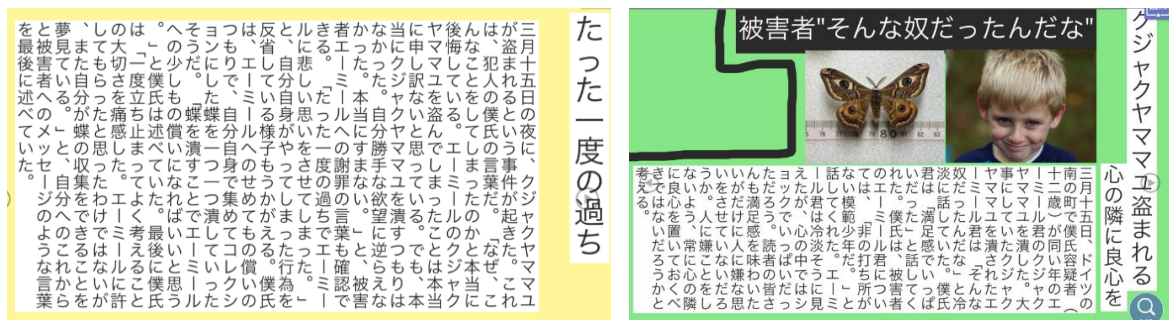
第一学年では、新聞の記事を読み比べ、同じ事実であっても視点(誰を中心に据えるのか)が変わることによって、その新聞記事から受ける印象が変

化することを学習した。事実を伝えるだけではなく、その事実から書き手がどのような視点で考えを述べているのか、そして読者に対して伝えたいことは何なのかということを読み取るために行った。同じ事件について取り上げられた異なる記事を配布し、その記事に見出しを見つけ、その後、全体で交流した。生徒は「ほかの班の見出しが違うことが不思議だったけれど、記事が誰目線で書か

れているので受ける印象が違ったので、見出しが変わるのも当たり前だと思った。」と感想を述べており、新聞などの記事を読むときに一つではなく、様々な視点を持つことへの興味を持つことができた。

次に、教科書中の教材である「少年の日の思い出」において、「僕」と「エーミール」の間に起きた出来事を新聞記事風にまとめる活動を行った。その際に生徒自身を新聞記者にして、「僕」と「エーミール」それぞれの立場に分かれて、記事を書くようにした。

それぞれの立場から記事を書き、グループの中でどの記事が最も印象に残ったのかを相互評価し、それぞれの代表が全体の前で発表した。その時に記事に用いた工夫や、事実のほかにどんな主張を入れたのかなどを伝えるようにした。先に学習した内容もあり、「僕」の立場と「エーミール」の立場とで、受ける印象が変わるような記事を書く生徒が多く、様々な視点で文章を書くことができていた。今後は文章読解の中で、様々な視点に注目して読解していくことを意識させたい。



(2) 社会科の実践

①第1学年の実践

第1学年では、新聞を通してSDGsについて考える授業を行った。学級の半数以上の家庭で新聞を取っておらず、身近なものとしての認識がないという現状があり、新聞記事をどのように読むかが分からない生徒もいた。新聞に対するイメージでは、文字が多い、内容が難しいなどマイナスなものが多かった。第1学年では、総合的な学習の時間でSDGsの食品ロスについて学んでいることから、より親しみやすい内容で新聞を読むことに留意した。記事を通して自分の考えを持ち、他者の意見を聞いて違いを基に深めることをねらいとした。授業は生徒にSDGsに関する新聞記事を2枚、iPadに送り、10分間でその新聞記事の内容を理解し、プリントにSDGsの何番目の目標とつながっているか、そのように考えた理由を記入させる。その後、自分が考えた目標と一言コメントを付箋に書き、A3に拡大した新聞記事に貼り付け、班で交流する活動を行った。

全員が同じ記事を読んだが、生徒が考えた目標は異なっているものもあり、

その違いを聞くことで学びを深めることができた。授業後の感想では、自分が思っていたよりも簡単な内容だったというものや、SDGs の取り組みは身近なものであることが分かったなどが挙げられた。今後は、身近な問題や政治・経済についても取り上げ、社会について知る機会を多く作ることを意識したい。

②第2学年の実践

②-1 まわしよみ新聞(新聞タイム)をしよう

第2学年では、「NIEのすすめ」の中にある「まわしよみ新聞」を導入として活用した。生徒はタブレットやスマートフォンの画面に慣れており、視界いっぱい広がる紙媒体を見ることが少ないため、個人の興味が持てる新聞記事を探し、取り組むことができる「まわしよみ新聞」が最適であると考えた。



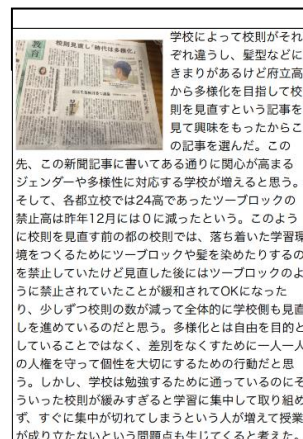
実践してみると、思わぬ行動が出てきた。新聞を読み、題材を決める時間を10分としたが、一部の生徒はそのまま読み続けたいと申し出てきたのだ。そのため、クラス全体に読むか作るか問うたところ、3分の1程度が読み続けることを選択した。気になる記事を撮り、ポスターを作成するグループと、読み続けるグループに変え、授業を続行した。「NIEのすすめ」のなかの「新聞タイム」に似たようなことを同時並行で行うことになった。読み続けることを選択したグループに理由を聞いてみると、「新聞を開いて読んでいくと、次々と気になる記事がでてくる。」「スポーツ欄でバスケットボールのニュースを見て、ほかの新聞、日付が違う新聞ではどんなバスケットボールの記事が出てくるか気になって探し続けたくなくなった。」などと答えた。作成するグループでは、「ほかの人がどんな記事を選んだか気になる。」「記事をあわせて作るのが楽しそう」などの理由が出てきた。「まわしよみ新聞」は導入として、新聞に興味を持たせていくために行ったことであったため、目的は達成できた。



②-2 気になる新聞記事に意見を書こう

「まわしよみ」新聞からの発展として位置づけ、気になる記事を iPad で撮影し、その記事に対する意見を書いた。比較的自分の意見を書きにくい生徒でも、自分にとって興味がある内容を選ぶことができたため、自分の思いを表現し、意見を書いていた。

右の作品Aは、「多様化とは自由を目的としているのではなく、差別をなくすために一人一人の人権を守って個性を大切にするための行動だ」と新聞記事を踏まえたうえで自分なりの意見を書くことができた。



(京都新聞 2022年6月5日)

②-3 特集記事を作成し、見比べよう

最初に「まわしよみ新聞」を導入、次に新聞記事に対して自分の意見を書いた。そして最後にどのような記事の配置が見やすいか、どのような記事がわかりやすく伝わるかを主軸において、特集記事のようなものを作成させた。

第2学年社会科では、地理分野・歴史分野において学んだことや調べて理解したことをさまざまな図で表現し、まとめを行ってきた。まとめのときには必ず「他者視点」を意識させた。授業で「他者視点」とは、他の人が見たとき、どこに・どのような理解をするのか、つまりどこがわかりやすい・おもしろいと感じるのかと伝えた。この新聞の特集記事で、その「他者視点」に着目させることで、教科の理解にもつなげている。

また、この特集記事を作成させていく中で、2つの動きを取り入れた。1つは「シャッフルタイム」と題して、作成途中の記事を見て回らせた。以下がその様子である。

①



②



①の写真のように個人で見て回る、②の写真からは複数人で記事に対して意見を言い合うなど、主体的に動いている。

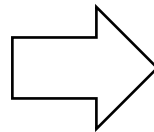
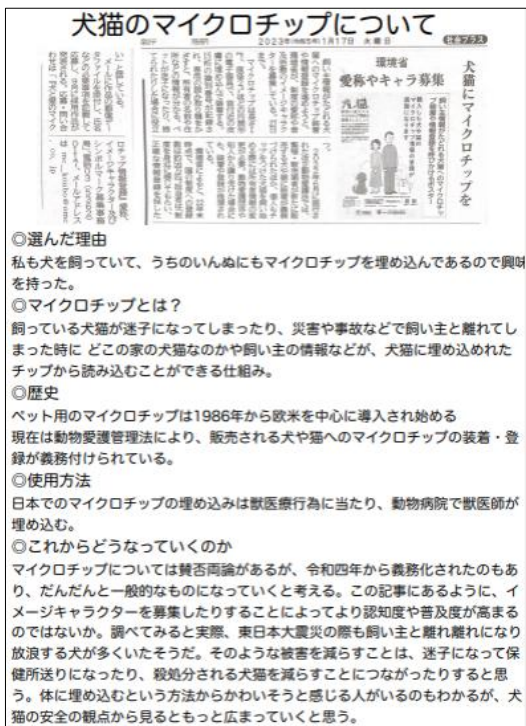


もう1つが、左図のようにオクリンクというアプリを使用して、アプリ上に提出し、生徒が提出された作品を自由に閲覧できるようにしたことである。

この2つから、生徒は他者視点のとらえ方を交流し、自分の作品にいかしていくことができた。一人ひとりがどの部分をわかりやすくしようとしているかを読み取ることによって、作品が変化していった。以下はその変化をあらわした2作品である。

切り口を変えたのが以下の作品Bである。内容はあまり変えず、ほかの人の作品を参考に構成を変えた。

作品B



(京都新聞 2023年1月17日付)

次の作品Cは、他の生徒との交流の中で、記事の時系列を特に意識したようである。コロナ関連の記事から、その時どうであったか、どのような対応がとられ、どのような報道がなされたか調べるようになった。時系列ごとに調べていくと、時間がかかったが、それを要約していく中で、今まで漠然と見ていたニュースなどが、一つの大きな流れとして新型コロナウイルス関連の記事を見ることができたようである。

作品C

コロナ「5類」引き下げ検討 来週めど医療費無料継続 (11/28)

【選んだ理由】
約9年間続いているコロナに対して政府はこれからどのような対策をとっていくのかが気になったから。

【調べたこと】

- ・全国の感染者数とともに死者数も減少している (2:全国の感染者数、3:全国の死亡者数)
- ⇒新型インフルエンザとう感染症に分類されていたのが、現在のインフルエンザと同様の5類に引き下げようとしている
- 新型インフルエンザ等感染症: 入院勧告、外出自粛要請、就業制限、があり、入院場所は指定医療機関、医療費は公費負担
- 5類: 入院勧告、外出自粛要請、就業制限、がなく、入院場所は一般医療機関、医療費は自己負担がある

(京都新聞 12月28日付)



コロナ「5類」引き下げ検討 来週めど医療費無料継続

【選んだ理由】
約9年間続いているコロナに対して政府はこれからどのような対策をとっていくのかが気になったから。

【調べたこと】

2020.1 新型コロナウイルスが登場

2020.3-5 第1波 初の「緊急事態宣言」
政府は人と人との接触機会を「見直し期、緩歩期」に削減すると日橋都道府県知事から飲食店やスポーツジム、ライブハウスなど幅広い業種に休業要請が出された。
全国的かつ大規模なイベントは中止や延期などの対応が求められた。

2020.6.7 緊急事態宣言が初めて発出された

2020.7-8 第2波 飲食店への時短要請
接待を行う飲食店など繁華街での感染者が多く報告
⇒全国に感染が広がっていた
東京など大都市圏で感染が拡大するにつれて中西年層へも感染が広がった。
緊急事態宣言が発出され、感染拡大した自治体で酒類を提供する飲食店やカラオケ店への営業時間の短縮要請が行われた

2020.7.22 政府の観光支援事業「Go To トラベル」が東京都発着分を除いてスタートした。

2020.11-2021.3 第3波 2回目の「緊急事態宣言」
より幅広い地域・年代層に感染が広がった。第2波とは異なり、家庭内感染の割合が大幅に増えた。年齢層も中高年、特に重症化リスクの高い高齢者の感染が激しく、比率とも増加。
⇒重症者が第1波、第2波よりはるかに多くなった

年末年始の恒例行事や帰省が感染の急拡大につながったと専門家は指摘。
⇒実際に2021年の年間け早々、新規陽性者数は一気に増えた。

2021.3.2 2度目となる緊急事態宣言を発出。
11日とは異なり、感染のリスクが高いとされる飲食店などへの時短要請に絞った対策をとった点。
⇒飲食店にはpm. 8までの時短営業を求めた。

2021.3-4 第4波 「まん延防止等重点措置」前適用
大阪府や兵庫県で急激に感染者が増え始めた
⇒政府は新しいコロナ対策を打ち出す「まん延防止等重点措置」
緊急事態宣言に至らないように予防的・集中的な対策をとることが強い

2021.5.7 大阪、兵庫、京都の3府県に初めて「まん延防止等重点措置」が適用

2021.6-6 「緊急事態宣言」と「アルファ株」
「変異ウイルス」によって関西で急激に広がった
英国で見つかった変異ウイルス(アルファ株)は従来型ウイルスよりも感染力が強い

2021.4.29 9日目となる緊急事態宣言を東京、大阪、兵庫、京都の4都府県におき発出した。
ゴールデンウィークを見越して、飲食店での酒類提供を禁じるなど前回よりも厳しい措置
⇒飲食店にはpm. 8までの時短営業を求め、酒類やカラオケを提供する飲食店には休業を要請した。
大規模施設にも休業を要請し、大規模イベントは原則無観客で行うことを主催者に求めた。

2021.7-8 第5波 4回目の緊急事態宣言
9日目の緊急事態宣言が解除された東京都は、6月21日からまん延防止等重点措置に切り替えられた。
⇒飲食店の酒類提供については一定の要件を満たした店のみpm. 7まで認められることになった。

2021.7.22 東京都に4日目となる緊急事態宣言を出した。
9日目の緊急事態宣言の後半の内容を継いだものだった。
⇒酒類やカラオケを提供する飲食店には再び休業要請がなされたほか、それ以外の飲食店や大規模施設にはpm. 8までの時短営業が求められた。大規模イベントは引き続き、上野5000人かつ収容率50%以下での収容率が維持された。

第9波が急激に拡大したのは、アルファ株以上に感染力が強いデルタ株の影響。

2021.7.29-8.11 コロナの影響で1年延期されていた東京五輪は、緊急事態宣言の発中の「異例の開催」となった。

2022.1-2 第6波 「オミクロン株」の急拡大

2022.1.9 沖縄、山口、広島が対象に、まん延防止等重点措置を適用。

2022.1.21 まん延防止等重点措置を東京、愛知など19都府県を対象に追加。

2022.1.27 大阪、北海道、福岡など14都府県が追加
対象地域はこの時点で29都府県まで拡大した。

2022.3.21 全ての重点措置が解除された

2022.7-8 第7波 初めての行動制限なしのお盆
個人での感染対策、地声的な換気が求められた。
要請などで手遅れに抗原キットを得ることができるようになった。

2023.1- 第8波 新たな終息を目指して
政府から目立った対策はない。
個人的な対策が必要とされている。

【これからどうなっていくのか予想】
現在のインフルエンザの同じようなウイルスにかわっていくと思う。かわったら、外出自粛要請がなくなったり、マスクの着用が自由になったり、など自由が増え、コロナが現れる前のような日常生活に戻ることができるようになると考えた。そのよう良い点もあるが、反対に悪い点もできくと思う。例えば、医療費などが自己負担になったり、自由なことが増えることから、感染者数が増えるのではないだろうかという点だ。これらから、政府はコロナをインフルエンザのように扱えるようにしていくと思うが、良い点だけをみるのではなくてそのことを行うにあたって、何をしたら良いのか、悪い点はないのか考える必要があると思う。

作品Cは時系列に沿って調べ、まとめたためあえてこの体裁をとったのである。

この取組の中で、特に意識させたことは「これからどうなっていくのか」である。現代において大量の情報が一気に流れてくることに慣れている生徒たちにとって、それらの情報を取捨選択し、それをもとに考えていく力は必要であると考える。情報に触れ、その後の動きを考えさせることが肝要であり、必須である。

る。多くの生徒がとても難しいと感じていたが、作成していく中で生徒同士の雑談の中に、情報を基に先を見通した発言があり、生徒たちの成長を感じた。

③第3学年の実践

第3学年では、新聞記事の中から気になる記事をピックアップし、自分で要約を行い、グループ内で交流するという活動を行った。ほとんどの生徒が新聞を読んだことがなく、新聞をとっているという家庭も少なかった。まずは、新聞がどのように構成されているか、新聞社によって見え方考え方が違うというところに気付かせた。そして、自分の興味があるものを見つけ、要約を行った。中には、「普段あまりニュースを気にして見ていなかったが、様々なことが起きていることに気付けた。」「地元のこと書かれており、こんなことも載っているのかと驚いた。」という意見があり、興味をもって様々な記事に触れることができた。そして、グループ内での交流では、自分の言葉でわかりやすく伝えるということを行った。新聞の中の難しい言葉も、タブレットを使用し、自分なりの解釈で伝えることができた。新聞に触れて、自分の言葉にするということを目的にしていたため、目的は達成できた。課題としては、新聞記事の内容が難しく、選定することが苦勞した生徒も若干数いた。

3. まとめ

N I Eの実践を行い、2年にわたって情報を取捨選択し、多面的な見方を養う実践を続けた。その中で、情報の方向性を生徒は感じるようになったように思う。国語科では書き手の視点、社会科では他者視点を意識していくことで、事実としての情報、そこにどのような意味を文章に持たせているかを読み取っていく。それはやはり「主体的に学び考える」ために必要な力であると思う。「この記事ではそう書いてある」・「それについて自分はこう思う」、などの意見を表現し、他の人と比べていく授業は、生徒にとっておもしろい。つまり主体的に学ぶ下地がつくられたようだ。ただそれと教科の授業を結び付けていく全体の取組が今回はできなかった。個々の場面では結び付けたが、限定的であった。それは時間数の問題や取り組む教科が限られていることなどが理由である。

新聞を使う、刻一刻とネットのニュースは変化していく中で、その時何を感じたか、どう社会問題を切り取ったかを如実に表す新聞は、過去・現在を確認できる手段として優れていると思う。その新聞を基にこの先どうなっていくかを考えていくことが、本校の教育理念である「自ら学び、心豊かで逞しく生きる生徒の育成」につながるはずである。

中学校 全学年 国語・社会・総合的な学習の時間 特別活動等

新聞で培う「ことばの力」 ～豊かな表現力、読解力、対話力～

宮津市立栗田中学校 教諭 塩見 優真

1. 本校の実態

本校では、「未来を生きる心身ともにたくましい生徒の育成」を教育目標とし、「主体性・挑戦意欲の高まる指導の研究」を令和4年度の研究テーマとして掲げて、教育活動を進めている。

生徒は、豊かな自然の中で、伸び伸び過ごし、学校行事や様々な活動においても意欲的に取り組むことができている。

しかし、少人数での生活が続くため、人間関係があまり変わらず、多様な考えが出にくい実態がある。さらに、世間で起きていることに対して、関心が持てず、視野が広がりにくい状況で過ごしている面も見られる。

目的

- ・日常生活や学習の中で、生徒の「ことばの力」の育成を図る。
- ・社会に対するものの見方を広げたり、記事（意見）に対する自分の考えを述べさせたりする力（表現力）の育成をめざす。
- ・考えを深めさせるとともに、お互いを認め合い、主体的に情報を発信する力の育成を図る。

2. 新聞の置き場所と整理方法

各学年フロアにNIEコーナーを設け、廊下で手軽に新聞を手にするができる環境を整えた。

昨年度と比較をすると、新聞コーナーに立ち止まって新聞に目を通す生徒が減少してきていた。そのなかで、教師が、生徒が興味を持ちそうな記事や、目にしてほしい記事が載っている面を表にした状態で置くようにしたことで、手に取って記事を読む生徒が増えてきた。



新聞の保管場所については、本校の図書館教育担当と連携し、図書室を保管する場所として設定し、図書委員会とともに整理をしている。

3. 実践の内容

(1) 新聞づくり

社会科や総合的な学習の時間で新聞づくりを行った。新聞の特徴を確かめながら割り付けを考え、実際の新聞と見比べながら作成できた。

2年生では、校外学習で学んだことをグループで一つの新聞にまとめる活動を行った。複数人で限られた紙面の中で、いかに分かりやすく表現し伝えられるか、試行錯誤しながらも新聞の構成・特徴を捉えて意欲的に取り組むことができた。



掲示板に随時、貼っていくという活動である。記事内の考えや行動に対して、一言コメントを付けて掲示させていたことで、新聞記事に対して自分の考えや立場を明確にする機会が増えた。

(3) 週末課題での活用

本校では、平日に出す課題とは別に、週末に出す課題を『週末課題』として取り組んでいる。NIE 実践を始めてからは、この週末課題を、新聞を活用した課題にしようと考え、オピニオンレポートに取り組んだ。内容は、教師が選んだ新聞記事に対して、読んで思ったこと・考えたことを自由に書く課題である。選ぶ記事は全学年同じであり、課題の裏面には、先週の記事に対する生徒たちの意見の数点を載せて配布していた。自分の書いた意見をもって交流させることまではできなかったが、他者の考えを載せることで、新たな気づきや考えが深まる様子が見えてきた。

多くの先生に記事を選んでいただき、教員全体で新聞を扱うという意識をつくることができた。

(4) 投書での活用

国語の授業の一環として、京都新聞の投稿欄「窓」へ意見文を投稿する活動を行った。この投書の活動を行うまでに、上記記載の週末課題のなかで投書の記事について意見文を書く活動を繰り返し取り組ませ、決められたテーマで他者の意見に対して自分の考えを持つ練習を行った。そして本取組では、テーマを自由にし、意見文を書かせて京都新聞に投稿する投書を作成した。

投書をするということは、子どもたちが新聞に参加するということになり、非常に有益であると感じた。

投書を書く 京都新聞に投稿しよう	年 組 番	氏名
---------------------	-------	----

【目標】多様な読み手を想像して、自由なテーマで投書を書く。

- 関心のある事柄や、普段興味を持っていることや考えていることから、題材を決める。
- 自分の意見と根拠を整理し、500字以内で書く。
- 観点が変わることで、「また」や「まず」「次に」「最後に」、「一つ目は」「二つ目は」などの言葉を入れるとわかりやすくなります。

テーマ	
意見	
根拠	
↓これらを踏まえて・・・	
タイトル	

テーマ (例)	勉強
意見 (例)	一夜漬けでテストに臨むのはよくない。毎日の積み重ねが大切。
根拠 (例)	一夜漬けで臨んだとき、寝不足と強い詰められているという精神的疲労で全然うまくいかなかったため。
↓これらを踏まえて・・・	
タイトル	非効率な一夜漬け

4. 成果と課題

(1) 成果

各学年ともに、教科等の学習や学級での取組に新聞記事を教材・素材として取り入れたことで、身近な社会や世の中の出来事に関心をもつようになってきた。特に、新聞を用いることの有効性を感じた点について、1つ目は、新聞が生徒の社会への興味や関心を抱かせるきっかけとなるということである。新聞はリアルタイムで世の中の出来事を報道してくれる。世の中で何が起きているのか、問題点は何なのかを知ることができ、興味のあることについてさらに調べ、自らの課題として捉え考えることによって、社会に参加していくことができる。

2つ目は、自分の意見を持つとともに、人の意見を知ることができるということである。特に本校は、自分の考えや思いを文章にまとめ、発表することはできるが、資料を活用して、考察し、説得力のある説明をしたり、主張することについては苦手意識を抱いている生徒が多い。また、互いに意見を交換するような活動を好まず、他者の意見を取り入れ、自分の考えを深めることについて慣れていない生徒も多い。そのような中で、身近な話題を題材にして、様々な立場の人の気持ちに立って物事を判断することで、他者理解に繋がったり、感想や意見が違うことで、様々な視点から考えたりすることができ、また、深く探求し理解することで、説得力のある説明をすることができる。

(2) 課題

今後の課題としては、新聞をじっくり読む時間を確保するということがあげられるが、関心ある社会事象についての1分間スピーチなど、自分の意見を発信する活動や探究する活動、多角的に物事を考えていく活動を継続して行い、更なる思考力・判断力・表現力の向上を図っていきたいと考えている。

今後、新聞が伝える情報の特徴を理解し、自分の学習課題に沿って資料収集ができる力や、新聞記事の文章構成やリード文の書き方など文章表現力や活用する力を、学年の学習内容等に沿って伸ばしていきたい。

今、子どもたちは手軽にインターネットを利用できる環境にあり、実際に全国各地でSNSによる子ども同士のトラブルも発生している。こうした時代だからこそ、新聞を活用した活動の中で「発信すること」の公共性や社会的な責任について自覚した表現者を育て、あるべき情報社会の姿を考えさせたい。

高等学校 国語科・地歴公民科・福祉科

「はぐくみたい3つの力(①基礎的な知識・技能 ②論理的に考え、伝える力 ③主体的に学びに向かう姿勢)」の育成のために

京都府立丹後緑風高等学校久美浜学舎 教諭 山下 豊子

1. 実践の概要

昨年度に引き続き、より多くの教科が新聞を活用して情報や考えを理解する活動や、聞き手に伝わるように発信する活動等に取り組み、学校の目標とする「はぐくみたい3つの力」の育成のために新聞を活用する実践を行った。

2. 新聞の置き場所と活用の仕方

該当教科以外の教員にも広く目に触れるように置き場所を工夫するべきだったが、4か月分の新聞を通年で保管するスペースは思いの外大きく、職員室内には持てなかった。昨年度は切り抜きをせずにコピーを取って利用したため、手間がかかることが課題として残った。そこで今年度は重複利用の配慮はせずに必要に応じて切り抜いて利用したが格別不都合はなかった。

3. 実践の内容

(1) 国語科 (3年生選択科目 国語表現)

〈まわし読み新聞〉

3～4人でグループを作る。京都新聞・読売新聞・毎日新聞の同じ日の新聞から、気になった記事を二つ選ぶ。選んだ記事と選んだ理由をグループで共有する。模造紙に壁新聞を作る要領で、選んだ記事をグループにまとめたり、配置に気をつけたりしながら貼りつけ、ひとつの作品に仕上げた。

【成果と課題】

○成果

新聞を購読しない家庭が増え、新聞紙に触れる機会も減る中で、インターネットで自分が興味を持ったニュースのみを知ることと、新聞紙をめくることでさまざまなニュースが目にとまる機会が持てることの違いに気づくことができた。

他者の選んだ記事から、同じ興味関心を持つ仲間気づいたり、新しい世界を知ったりすることができた。

○課題

新聞に接する機会が少なく、記事を読むことへの慣れも少ないからか、モデルケースの時間配分では不足、大幅な時間延長が必要だった。

熱心に読み込んだり、感想を発表しあったりすることはよい風景であったが、授業計画の変更を要したのは課題である。



(2) 国語科 (3年生 現代文探究)

〈1面記事の比較(新聞の読み比べ)〉

京都・朝日・毎日・読売・産経・日経各紙の同日の新聞から、1面の記事を比較する。

同じ出来事を扱っていても、タイトルの表現や記事内容の論調が違うことを知ることができた。



(3) 地理歴史・公民科(3年生選択科目 政治・経済)

- ・授業の中で適宜、新聞記事を取り上げて紹介。
- ・新聞記事の一部をまとめ、定期考査に出題。

【成果と課題】

○成果

授業の中で紹介程度にとどまったものの、世間で起こっている出来事に対し、関心をもたせることができた。主権者として、ニュースや新聞にふれることの大切さを感じさせることができた。

○課題

授業時間の関係もあり、記事の紹介にとどまってしまい、実際に新聞に接する機会をつくることができなかつた。同じ出来事にしてもニュースや各新聞社でどのような違いがあるかなどについて考察ができなかつた。

(4) 福祉科(2年生選択 介護福祉基礎)

〈記事まとめと考察〉

10～12月の新聞の中から1500字以上の〈介護・福祉〉に関連する関心ある記事を選び、記事の要約(200字)と考察の記述

【成果と課題】

○成果

新聞購読家庭は約半数、購読家庭でも生徒自身はほとんど新聞を手にしな
(スマホ中心で番組欄を探してまでテレビ番組も見ない)生徒達に新聞に親しむ
機会となった。授業で扱っていない外国の情報や、〈介護・福祉〉に関連ある社
会問題の幅広さを知れた。出来事を少しだけ知っている内容の記事を見つけて読
み込み、「よく分かった」と納得する場面もあり、ネットニュース記事との違い
を感じた生徒もいた。

○課題

授業課題なので取り組まなければ、と、生徒は記事探しの1時間、熱心に新聞
に見入っていた。しかし新聞の意義に気づき、授業課題でなくても生活の中で新
聞を活用していこうと思った生徒はいなかった。
情報収集手段としてはスマホで十分という姿勢に変化を起こせなかった。



記事の見出し (内容が一目でわかる題をつける)	全世代型の社会保障改革									
新聞・雑誌名、掲載日	産経新聞 12月17日									
内容	<p>高齢者の自己負担増やサービスの縮小を強化するだけでは問題は解決しない。実態を見ると今後増えていくのは80代以上が中心である。高齢者の単独世帯は上昇している。85歳以上の要介護者には配偶者を亡くして「老老介護」がままならない人も多く、50代の子世代が介護にあたりつつあるケースが少なくない。50代の要介護者は183万600人。社会保障制度を持続可能なものにするには「全世代型」への移行だけでは不十分である。社会保障制度の枠内での改革には限界がある。</p>									
感想・意見	<p>85歳以上人口の推移を見ると現在は620万人だが2060年には1152万人と倍増していることばかりで、早く高齢社会に適した対策方法を考えるべきだと思った。老老介護をしている人も多く、そのためには老人ホームに入所しやすい環境作りが大切になっていくと考えた。子供は「お年寄りだ」、全ての人の生活を生涯にわたって支える社会保障制度の改革だけでは対応することができない現状を知って本当に高齢化が進んでいるんだと実感した。要介護者が多ければ介護者もとても重要な存在になるから、しほりと福祉に詳しい学生を少しだけ役に立てるようになりたいと思った。高齢者の単独世帯が増えているため世帯の交流の場を増やしてコミュニケーションをとることで生きがいを与えられたら少しでも明るく生活を送ってもらえると考えた。</p>									

新聞記事から社会の課題を考え、問いを立てる

京都橘高等学校 教諭 小坂 至道

1. 本校での新聞活用（概要）

本校では、もともと複数社の新聞（朝日新聞、読売新聞、毎日新聞、京都新聞、および The Japan Times）を用意し、職員室前の自学習・相談スペースに隣接して閲覧できるように工夫されている。しかし、中学生から高校生まで、朝のひとときや昼休み・放課後の面談待ちの時間などに新聞をめくる生徒がぽつぽつといる状況であった。

今回、N I E 実践に参加するにあたり、一部の生徒だけではなく、多くの生徒が授業の中で活用できるようにしたいと考え、高校2年と3年の総合的な学習の時間と、高校3年の学校設置科目の中で活用する方法を模索した。

まず、年度当初には、一斉に新聞を活用する状況を確保するために、朝日新聞社のプログラムを取り入れた。次に、各社の新聞紙を授業内で教室に持ち込んで、読み比べて各社の視座を考えたり、社会課題を深掘りしたりするための材料として利用するようにした。

こうした過程を経て、本校では新たに日本経済新聞を採用するようになったほか、司書教諭の協力のもと、閲覧台を新調してより読みやすくすること、過去1週間ほどの新聞に遡って確認できるように工夫されることが決まった。

（写真1）

職員室前（右扉）に新調された新聞の閲覧台。下の棚には、過去数日分の新聞が置かれていて、さかのぼって読むことができる。図書室（左奥）へのアクセスもよい場所に設置されている。



2. 実践事例

ここでは、おもに朝日新聞社のプログラムを活用した総合学習における実践事例（A）と、社会特講（学校設置科目）での実践事例（B）を報告する。

A 総合学習における実践事例（高校2・3年）

（1）SDGsを切り口とした社会課題の学習（総合的な学習の時間＝2年）

以下に示す実践は、授業の設定としては「総合的な学習の時間」ではあるが、新学習指導要領の「総合的な探究の時間」を見据えた改変を進める中での試行錯誤の事例である。このプログラムの概要は次の通りである。

朝日新聞の協力のもと新聞をクラス人数分だけ用意し、SDGsの目標ごとに色分けされた付箋、課題を分析するためのシート等を利用する。

生徒は、各自で新聞を読み、興味を持った記事内容がSDGsのどの目標に関係する内容かを考えて付箋を貼る。それを班の中で共有する。また、教室の壁一面に貼り付けた新聞紙に、みんなで付箋を貼りなおして、クラスの関心がどのような記事に向いているかを共有する。こうした中で、自分や他者の関心・興味のあり方や視点の持ち方を考える。また、班ごとに特に取り上げたい記事を1つ選んで、SDGsの目標にもとづいてどのような課題を指摘できるのかの分析を行い、班ごとに発表を行う。

（写真2）

班ごとに選んだテーマをSDGsのゴールに関連させて分析し、考えたことや気づいたことを発表した。



高校2年生では、自らの関心・興味と社会の課題（要請）を結びつけて課題解決を考えていく、探究的な総合学習を目指していた。その中での本実践の位置づけは、探究活動の前提であった。まず、社会の課題にはどのようなものがあるのかを知ること、次に多様な社会の課題への視点やアプローチにはどのようなものかを知るということに主眼を置いた。その後、各自が関心・興味を持つ課題を取り上げつつ、探究するテーマの設定に結びつけていく過程をたどった。

また、新聞記者がどのように社会課題に向き合っているのかの講演を聴いたり、調査をする中でのインタビューの仕方（質問の作り方）を考えるワークショップを行ったりした。

(2) SDGsを切り口とした社会課題の学習（総合的な学習の時間＝3年）

高校3年生では、自分たちが参画していく社会について考えていくべきこととして、おもに3つのテーマを挙げている。それは、「働くことを通じた社会への貢献」、「社会の中で求められる多様性（特に性のグラデーション）」、「死から逆算して考える自分の生き方・あり方」である。1学期には、これらを考える前提づくりとして、高校2年生と同様の新聞を活用した取り組みを行った。高校2年生と異なるのは、その後の学ぶテーマが絞られている点ではあるが、すでに学んでいたSDGsの復習的な側面を持ったことと、多様な視点をもつことに意義があったと考える。

(3) 生きる指針（自分のあり方）を問う取り組み

（総合的な学習の時間＝3年）

高校3年生の2学期後半には、これまでの学びの集大成として、生徒は各自で「私の生きる指針」をまとめ、発表した。さらに自分たちのあり方をよりいっそう深めて考えることと、その成果を形に残すことを目指して、クラスごとに新聞づくりを行った。新聞記者によるインタビューの仕方のワークショップを受けて、生徒同士が相互にインタビューし、その相手の「生きる指針」を前提にその人の記事を書いてまとめていった。これは、各社の人物に焦点を当てたコラムが参考になって生まれた取り組みであり、クラスごとに発行した新聞は、卒業記念としてもよい成果物となった。

B 社会特講における実践事例（高校3年）

社会特講は、高校3年生の文系クラス（世界史・日本史の選択者の合同講座）で実施される科目で、週2単位の学校設置科目である。この科目では、1学期から2学期前半にかけて、ウクライナ・ロシア問題を軸に、国民国家や戦争・平和などについて学んだ。2学期後半には、それぞれの関心にもとづいたテーマで、個人または2～3人のグループで授業形式の発表を行った。

(1) 問いづくりの素材としての新聞記事の活用

4月当初は、様々な資料（新聞紙、雑誌、ソーシャルメディア等）の内容を掘り下げて読む工夫として、教員が選定した新聞記事の内容について問いを立てる練習をおこなった。本実践では、特定少年の実名報道について触れている記事を選び、それについて問いを立てた。言葉の意味を問う比較的簡単な問いから、加害者側・被害者側それぞれへの報道の影響は何かという比較的深められそうな問いまで幅広く見られた。

この経験をもとにして、問う視点で資料を読むことを意識づけていった。

(写真3)

問いづくりのワークシート。○印はオープンクエスチョン、△印はクロズドクエスチョンの分類を示し、問いを立てた生徒たちが判断している。その中でそれぞれの問いの性質の違いなども考えた。

番号	○ △	質問
1	○	「はじめて成人は成人という」と「実名報道されないのか？」
2	△	「中には言葉や性別が明確な日もあるのでは？」
3	○	「はじめて成人は成人という」と「実名報道されないのか？」
4	○	「実名報道」と「匿名」のどちらが「虚言」的には？」
5	△	「成人は匿名でも可能なはずと表わされているのか？」
6	△	「匿名」の「匿名」は「匿名」に「匿名」は？」
7	△	「成人は実名報道されてはいいのか？」
8	△	「実名報道」と「匿名」のどちらが「虚言」的に「どちら」が「落ち着く？」

(2) 生徒が自分たちで行う授業

2学期の後半は、ほぼ進路の方向性は確定している中で、自分の関心・興味のある課題・テーマを整理し直し、他の生徒に伝える取り組みを行った。ただの調べ学習とならないように、「他の生徒に授業を行う」ことを条件とし、中心になる発問を用意するよう指示した。授業の形式は、スライドを使った説明中心のもの、プリントを用意して穴埋めをするもの、クイズに近い発問をするものなど様々であったが、他の生徒とのコミュニケーションを取り、一方通行の授業にならないように工夫されているものが多かった。

ここでの新聞活用は、テーマの選定、資料の検討（複数紙の比較）、発表時の資料としての活用である。「自分の授業でうそを教えられない」という意識が働いたのか、自分の関心あるテーマだからか、非常に熱心に新聞を読み込み、iPadでの検索と合わせて「教材研究」をしている様子が見ええた。この過程で、社会の課題が、幾層にも課題を抱えていることに気がついた生徒もみられた。

(写真4)

テーマ選定のために新聞紙をめくる生徒たち。同じようなテーマを選んだものは、同じチームとして発表した。

テーマは多岐に及び、いずれも興味深い授業内容であった。



3. ふりかえり

(1) 生徒のようす

A 総合学習での活用

①高校2年

生徒のふりかえりコメントからまとめていくと、新聞を使って他の生徒と調べ直したり意見を伝えあったりする活動が、「単純に知識を増やすことだけでなく多様な視点や価値観を学ぼうと役に立った」、「自分の意見を持ったり社会にどう向き合うかということを考えるようになった」などのコメントが多かった。また、そもそも、新聞紙を手にとること自体が初めてという生徒も多数おり、「自分がふだん目にしない情報にも触れることができた」といったコメントもみられた。

②高校3年

新聞を使ったSDGs学習については、SDGsをすでに多く学んでいた学年だったこともあり、やや新鮮さに欠けた感があったようである。

一方で、お互いの生きる指針を掘り下げるインタビューとその記事の作成では、楽しく、興味を持った活動ができていた。記者によるインタビュー講座も、すぐに生徒相互のインタビューにつながった点で効果が大きく、生徒の学びの実感も大きかったようである。記事にまとめていく段階では、情報の取捨選択や文章表現などに苦勞していたようであるが、友人の話をもとめるので手を抜くわけにもいかず、良い負荷となったといえる。

B 社会特講での活用

新聞記事から問いを立てることに難しさを感じる生徒は多かったが「情報をただ受け入れるだけでなく、問いを立てながら考えられるようになった」とのコメントもあった。また、「様々な記事を目にしたことで自分の関心・興味の持ち方に気づいた」、「色々調べて、芋づる式に情報がつながって行って新しく知ることが増えたのが楽しかった」といったコメントが多数みられた。高校3年生であったこともあり、発表にもそれなりに慣れていて、いかにうまく表現するかを楽しんでいる生徒もみられた。

(2) 実践者の感想

ただ新聞を読む、わからない言葉を調べる、といった活動では、生徒の学びの意欲は上がらない。かつて、新聞のコラムを読んで、タイトルをつけたり、感想を一言記入したりするなどの取り組みもしたことがある本校であるが、それらは、ややもするとマンネリ化していた。

今回の諸実践を振り返る中で、生徒がかなり具体的なアウトプットを想定して取り組むこと、その過程で生徒同士が豊かにコミュニケーションをとる

機会が確保されていることが、生徒の学びの意欲を高め、維持することに役立つという実感を得られた。特に、生徒の日常（家庭生活）にはみられなくなりつつある新聞紙を使って学習を進めていく中では、新聞が「情報量が多くて面倒な資料」ととらえられるか、「自分では目の向きにくい新鮮な素材が豊かな資料」ととらえられるかに分かれ目があると思われた。活動全体のデザインによるところもあり、インプット・アウトプットのあり方を工夫し続けていくことが必要と考える。

(3) 反省点や課題点

新聞紙の活用という点に着目すると、新聞を使ったワークや探究に向けた情報収集の段階では、比較的新聞を手に取り、複数紙を見比べるという活動がみられたが、それ以外の場面で継続的に新聞を読むようになったかといわれると、実感としてはやや乏しいものがある。

また、今回は情報の収集に力点が置かれた学習が多かったが、今後は、ある事実がなぜそう表現されたか（新聞社／書き手でなぜことなるか）、そのことが読者にどういう影響を与えうるのか、など、一段と視点を上げた記事の読み込みにもチャレンジしていきたい。

年度	校数	<これまでの実践校・準実践校・奨励校・トライアル校>
1994	2	聖母学院小学校、京都府立商業高等学校(現すばる高等学校)
1995	3	聖母学院小学校、京都市立修学院中学校、同志社高等学校
1996	3	京都市立百々小学校、京都市立修学院中学校、立命館宇治高等学校
1997	3	京都市立百々小学校、京都市立修学院中学校、立命館宇治高等学校
1998	2	京都市立百々小学校、京都市立修学院中学校
1999	3	京都市立養正小学校、京都市立吉祥院小学校、京都文教女子高等学校
2000	3	京都市立養正小学校、京都市立吉祥院小学校、京都文教女子高等学校
2001	6	京都市立山王小学校、京都市立清水小学校、大山崎町立第二大山崎小学校 京都市立花山中学校、八木町立八木中学校、京都文教女子中学校
2002	9	京都市立山王小学校、京都市立清水小学校、大山崎町立第二大山崎小学校 京都市立衣笠中学校、京都市立伏見中学校、八木町立八木中学校 京都文教女子中学校、京都府立北稜高等学校、花園中学高等学校
2003	10	京都市立第三錦林小学校、京都市立山階小学校、亀岡市立曾我部小学校 八幡市立美濃山小学校、京都市立衣笠中学校、京都市立伏見中学校 向日市立勝山中学校、京都府立北稜高等学校、花園中学高等学校 華頂女子中学高等学校
	4	(準)京都市立山王小学校、京都市立清水小学校、大山崎町立第二大山崎小学校 八木町立八木中学校
2004	10	京都市立第三錦林小学校、京都市立山階小学校、聖母学院小学校 亀岡市立曾我部小学校、八幡市立美濃山小学校、京都市立洛北中学校 京都市立洛南中学校、向日市立勝山中学校、長岡京市立長岡第三中学校 華頂女子中学高等学校
	6	(準)京都市立山王小学校、京都市立清水小学校、京都市立伏見中学校 八木町立八木中学校、花園中学高等学校、京都府立北稜高等学校
2005	9	京都市立紫竹小学校、京都市立嵯峨野小学校、聖母学院小学校 京都市立洛南中学校、京都市立洛北中学校、京都市立蜂ヶ岡中学校 長岡京市立長岡第三中学校、京都教育大学附属桃山中学校 京都市立塔南高等学校
	8	(準)京都市立第三錦林小学校、京都市立山階小学校、八幡市立美濃山小学校 京都市立伏見中学校、向日市立勝山中学校、京都府立北稜高等学校 花園中学高等学校、華頂女子中学高等学校
2006	10	京都市立紫竹小学校、京都市立嵯峨野小学校、京都市立鏡山小学校 城陽市立寺田西小学校、京都市立蜂ヶ岡中学校、京都市立旭丘中学校 京都教育大学附属桃山中学校、亀岡市立育親中学校 京都市立塔南高等学校、京都市立洛陽工業高等学校
	7	(準)京都市立第三錦林小学校、京都市立山階小学校、八幡市立美濃山小学校 京都市立洛北中学校、京都市立洛南中学校、長岡京市立長岡第三中学校 華頂女子中学高等学校
2007	11	京都市立鏡山小学校、京都市立静原小学校、京都市立松尾小学校 城陽市立寺田西小学校、向日市立第5向陽小学校、京都市立旭丘中学校 京都市立久世中学校、京都市立西京高等学校附属中学校、同志社中学校 京都府立園部高等学校、京都学園高等学校
	7	(準)京都市立紫竹小学校、京都市立嵯峨野小学校、京都市立洛北中学校 京都市立蜂ヶ岡中学校、京都教育大学附属桃山中学校 京都市立洛南中学校、長岡京市立長岡第三中学校

年度	校数	<これまでの実践校・準実践校・奨励校・トライアル校>
2008	10	京都市立静原小学校、京都市立松尾小学校、京都市立吉祥院小学校 向日市立第5向陽小学校、京都市立久世中学校 京都市立西京高等学校附属中学校、京都市立下鴨中学校、城陽市立西城陽中学校 京都府立園部高等学校、京都学園高等学校
	2	(奨励校)立命館小学校、京都市立周山中学校
	5	(準)京都市立紫竹小学校、京都市立鏡山小学校、京都市立蜂ヶ岡中学校 京都市立旭丘中学校、京都教育大学附属桃山中学校
2009	10	京都市立吉祥院小学校、京都市立安井小学校、京都市立一橋小学校 京都市立二条中学校、京都市立下鴨中学校、京都市立桂中学校 城陽市立西城陽中学校、綾部市立上林中学校、宮津市立養老中学校 京都府立鴨沂高等学校
	6	(準)京都市立静原小学校、京都市立松尾小学校、向日市立第5向陽小学校 京都市立西京高等学校附属中学校、京都府立園部高等学校 京都学園高等学校
2010	10	京都市立月輪小学校、京都市立安井小学校、京都市立一橋小学校 福知山市立大正小学校、京都市立北野中学校、京都市立二条中学校 京都市立桂中学校、宮津市立養老中学校 京都府立鴨沂高等学校、東山中学高等学校
	7	(準)京都市立吉祥院小学校、京都市立松尾小学校、京都市立静原小学校 向日市立第5向陽小学校、京都市立下鴨中学校 京都市立西京高等学校附属中学校、京都学園高等学校
2011	10	京都市立月輪小学校、京都市立竹の里小学校、京都市立葵小学校 福知山市立大正小学校、京都市立北野中学校、京都市立向島中学校 八幡市立男山第三中学校、京都教育大学附属京都小中学校、東山中学高等学校 京都府立東稜高等学校
	5	(準)京都市立吉祥院小学校、京都市立一橋小学校、京都市立下鴨中学校 宮津市立養老中学校、京都府立鴨沂高等学校
2012	10	京都市立藤ノ森小学校、京都市立竹の里小学校、京都市立葵小学校 京都市立西陵中学校、木津川市立木津南中学校、京都市立向島中学校 八幡市立男山第三中学校、京都教育大学附属京都小中学校、 京都光華中学・高等学校、京都府立東稜高等学校
	5	(準)京都市立月輪小学校、京都市立一橋小学校、宮津市立養老中学校 東山中学高等学校、京都府立鴨沂高等学校
2013	10	京都市立藤ノ森小学校、京都市立朱雀第六小学校、京都市立藤城小学校 木津川市立恭仁小学校、京都市立西陵中学校、木津川市立木津南中学校 京都市立西京極中学校、長岡京市立長岡中学校、京都府立向陽高等学校 京都光華中学・高等学校
	2	(準)京都市立竹の里小学校、八幡市立男山第三中学校
	1	(トライアル校)宇治市立笠取第二小学校
2014	10	京都市立朱雀第六小学校、京都市立藤城小学校、京都市立明德小学校 木津川市立恭仁小学校、京都市立双ヶ丘中学校、京都市立西京極中学校 長岡京市立長岡中学校、八幡市立男山東中学校、平安女学院中学校高等学校 京都府立向陽高等学校
	5	(準)京都市立竹の里小学校、八幡市立男山第三中学校、京都市立藤ノ森小学校 木津川市立木津南中学校、京都光華中学・高等学校

年度	校数	<これまでの実践校・準実践校・奨励校・トライアル校>
2015	10	京都市立明德小学校、京都市立高倉小学校、京都市立衣笠小学校 京都市立双ヶ丘中学校、京都市立伏見中学校、八幡市立男山東中学校 京田辺市立田辺中学校、木津川市立山城中学校、京都府立東舞鶴高等学校 平安女学院中学校高等学校
	3	(準)京都市立西京極中学校、長岡京市立長岡中学校、京都光華中学・高等学校
2016	10	京都市立高倉小学校、京都市立衣笠小学校、京都市立宇多野小学校 京丹波町立瑞穂小学校、京都市立伏見中学校、京都市立大枝中学校 京田辺市立田辺中学校、木津川市立山城中学校、京都女子中学校高等学校 京都府立東舞鶴高等学校
	2	(準)八幡市立男山東中学校、平安女学院中学校高等学校
2017	11	京都市立宇多野小学校、京都市立山階南小学校、京田辺市立松井ヶ丘小学校 京丹波町立瑞穂小学校、京都市立京都御池中学校、京都市立大枝中学校 木津川市立木津第二中学校、亀岡市立亀岡中学校、綾部市立上林中学校 京都女子中学校高等学校、京都府立久御山高等学校
	3	(準)京都市立高倉小学校、京田辺市立田辺中学校、木津川市立山城中学校
2018	11	京都市立竹の里小学校、京都市立山階南小学校、京田辺市立松井ヶ丘小学校 京都市立京都御池中学校、京都市立深草中学校、木津川市立木津第二中学校 亀岡市立亀岡中学校、綾部市立上林中学校、南丹市立八木中学校 ノートルダム女学院中学高等学校、京都府立久御山高等学校
	0	
2019	9	京都市立新町小学校、京都市立竹の里小学校、宇治市立大久保小学校 伊根町立本庄小学校、京都市立下鴨中学校、京都市立深草中学校 南丹市立八木中学校、ノートルダム女学院中学高等学校 京都府立須知高等学校
	2	(準)京都市立京都御池中学校、綾部市立上林中学校
2020	8	京都市立新町小学校、京都市立竹の里小学校、宇治市立大久保小学校 伊根町立本庄小学校、京都市立下鴨中学校、京都市立大淀中学校 龍谷大学付属平安高等学校、京都府立須知高等学校
	1	(準)綾部市立上林中学校
2021	9	京都市立竹の里小学校、京都市立羽束師小学校、京田辺市立草内小学校 京都市立大淀中学校、京都市立花山中学校、八幡市立男山東中学校 宮津市立栗田中学校、京都府立久美浜高等学校・丹後緑風高等学校久美浜学舎 龍谷大学付属平安高等学校
	9	京都市立羽束師小学校、京都市立神川小学校、京田辺市立草内小学校 京都市立花山中学校、京都市立小栗栖中学校、八幡市立男山東中学校 宮津市立栗田中学校、京都府立丹後緑風高等学校久美浜学舎 京都橘中学校・高等学校
2023 (予定)	13	京都市立羽束師小学校、京都市立神川小学校、京都市立七条第三小学校 京都市立光徳小学校、京都市立新町小学校、京都市立御所南小学校 京都市立小栗栖中学校、京都市立西京高等学校附属中学校、宮津市立栗田中学校 綾部市立八田中学校、京都橘中学校・高等学校、京都府立峰山高等学校 京都両洋高等学校

2022(令和4)年度 京都府NIE実践報告書

2023年7月発行

編集 京都府NIE推進協議会事務局

〒604-8577 京都市中京区烏丸通夷川上ル

京都新聞社内

TEL : 075-241-5231

Email : nie@mb.kyoto-np.co.jp